

思想の隅景

アインシュタインは1920年に来日した。12月14日、京都大学での「いかにして私は相対性理論を創ったか」(石原純訳『アインシュタイン教授講演録』、改造社、1923)という講演テーマは、西田幾多郎が所望したものだったという。西田は、相対性理論は物理現象の真相に徹底したものと評価していた。それではアインシュタインの側から西田哲学を検討すると、どうだろう。従来そんな試みがなされたとは聞かないが、以下はその初歩的な妄想の実験である。

西田哲学のひとつの鍵は、「一切即一・一即一切」。華嚴経の世界に由来する比喩だが、一微塵のなかに全世界を映じ、一瞬のなかに永遠を含む、という。そこで問題。インドラ(盧遮那仏)の帝網(Indrajala)の宝玉ひとつひとつに全世界が映るといふのだが、これは光学的に映っているのだろうか。宇宙の果ての近くになると、地球から光速に近い速度で遠ざかっているという。そこに地球が写るには、それこそ弥勒菩薩ではないが、五六億七千万年待たねばならぬやも知れぬ。光が届く以前に宇宙が終焉を迎えるやも知れぬ。そしてそれは宇宙の大きさの定義ともかかわる観測問題だ。とまれ、一瞬が永遠を宿すためには、光学的伝達では間に合わない。

かつて通俗的な相対性理論の子供むけ解説書には、こんな問いがあった。光子ロケットとどうやって通信するか。光では光には追いつけない。光速を超えた同時性となると、直感に頼るしかない。一時期、さる国の軍事機密として、霊能者を集めて、ひそかにテレパシーの研究がなされたとい

「絶対矛盾的自己同一」と「一切即一」との矛盾を相対性理論に読む

ゲーデル・アインシュタイン・西田幾多郎

2005
09/03
付録
2740号

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授 稲賀繁美

う。大友克洋の『アキラ』の世界だ。個が無限の全体を包み、一瞬が永遠を含む。そのためには、光速という制限を超える同時的感応の必要がある。そこに論理的に開けてくるのが「純粹経験」とともに「絶対矛盾的自己同一」という、西田哲学の、もうひとつの鍵概念となる。

一なるものは、一に留まっている限り、自己を対象化できず、自己認識も及ばない。自己をそれとして認知するためには、他者の存在が前提となる。すなわち、多数性が保証されなくては、一なるものを見いだす契機も得られない。従って「神は自己否定において、自己を有つ」。ここに「絶対者の自己限定」が要請される。しかし「多」あってはじめて見いだされる「一」とは、すでに定義からして一たる所以を失っている。かくして現実とは、論理的には「絶対矛盾的自己同一」(identité du soi comme contradiction absolue)と定義できる。言い換えれば「寸心蔵世界」だが、ここまできれば、自己なり他者なりという主体を前提とした世界観は、脱却される。世界と吾とは、いわば相互に入れ子細工となった二つの箱である。そのふたつの箱が接した肌が、世界を写し、自分が世界に写し出される投影幕[スクリーン]なのだが、そのスクリーンがあってはじめて、主体(および世界)の成立という幻想が成り立つ。

『善の研究』がエマニュエル・カントの体系の換骨奪胎とは、よく指摘される。『善の研究』は、純粹経験、実在、善と展開するが、これが順番に『純粹理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』に対応し、その

先に宗教の考察が置かれている。加えて新カント派のエルネスト・カッシーラーの『実体概念と関数概念』にも顕著なように、主体の哲学から関係概念への置換が当時の物理学知識の刷新と並行する現象であることは、同時代の哲学者たちも認識していた。

だが速度と距離の相対的相互決定は、量子の水準では妥当する議論だとしても、日常のマクロの水準では妥当しない。ところが西田の議論は、「絶対矛盾的自己同一」をオールマイティーのカードに、量子物理学の世界を「方便」として、寸法を無視した逸脱の類推に耽る。そう、オーギュスタン・ペルク氏は批判する。これと同様に、ゲーデルの不完全性定理は、数学基礎論の内部の厳密な公理系でしか成立しない。だがそれは頻繁に、一般の論理に逸脱して当て嵌められてきた。それを前提として、最後の荒唐無稽なる禅問答。西田の「絶対矛盾的自己同一」は、ゲーデルの不完全性定理によって自己の無矛盾性を証明できぬのか否か、西田先生？

* Agnieszka Kozyra, *Filozofia Zen* 2003を巡る議論に触発された。謝意を表す。なおコジラ教授は西田の相対性理論に関する論文もポーランド語訳されている。またポーランドにおける日本学の沿革に関しては、同氏による綿密な報告が、『日文研』国際日本文化研究センター広報誌、33号、2005年に掲載されている。さらに金子務『アインシュタイン・ショック』(1981/91)は2005年、岩波現代文庫に収められている。